

氏 名 泉 麻衣子
学位の種類 博士(音楽)
学位記番号 甲第27号
学位授与年月日 平成31年3月25日
論文題目 R. シューマンの《暁の歌 Gesänge der Frühe》Op. 133
－標題の象徴表現からみる作品解釈－
学位論文等審査委員

＜リサイタル審査＞

主 査	教 授	阿部 裕之
副 査	教 授	砂原 悟
副 査	教 授	柿沼 敏江
外部審査		藤本 一子

＜論文審査＞

主 査	教 授	阿部 裕之
副 査	教 授	砂原 悟
副 査	教 授	柿沼 敏江
外部審査		藤本 一子

論文要旨

本論文は、R. シューマンが自ら出版に関わった最後のピアノ作品《暁の歌 Gesänge der Frühe》Op. 133 について、ヘルダーリンの書簡体小説『ヒュペリオン —— あるいはギリシャの世捨て人』との関係を調査し、後期歌曲との関連から作品に内包される詩的内容を解明しようとするものである。また《暁の歌》の作曲された 1853 年前後のシューマンの周囲の状況を通して、本作品がシューマンの後期においていかなる意味を持つかについても考察し、新たな作品解釈を試みる。

序論では、《暁の歌》作曲前後のヨーロッパ情勢及びシューマンのめざましい創作活動について述べた。デュッセルドルフの音楽監督に就任したシューマンは社会の動向に敏感に反応しながら多岐にわたる創作を行った。

第 1 章では、《暁の歌》の作曲の経緯と出版、被献呈者、原資料と表題について述べた。自筆譜にはヘルダーリンにとって救済愛の象徴である「ディオティマ」の名が記されていた。作品の被献呈者ベッティーナ・フォン・アルニムはシューマンと最後の手紙のやり取りをした女性でもある。

第 2 章では、《暁の歌》の特徴的作曲原理を明らかにした。作品全体は、詩的構想に基づく関連要素が暗示的また回想的に配置され、繊細に呼応し合う構造を成している。また全曲を通じて反復の原理が通底していることが大きな特徴であり、平面的な並列的手法、立体的な音響の構造、謎めいた曖昧さ、バッハのヴァイオリン曲に倣ったポリフォニックな書法といった斬新な手法が見られる。

第 3 章では、ヘルダーリンの『ヒュペオ』と関係を調査し、それをふまえて音名を象徴として用いる手法の考察を行った。《謝肉祭》との比較考察により、より抽象的、内面的になった音名象徴の手法に、後期における様式の成熟を見出すことができた。

第 4 章では、書法上の関連のみられる後期歌曲の詩の内容を考察し、詩的解釈を導き出した。諦観やレクイエムを内容とする歌曲と共通点を持つこの作品は、シューマンが生涯の最後に諦観境地を歌った楽曲と言えるのではないだろうか。

最後に、第 5 章結論においてはこれまでの分析及び考察結果を総合して、標題に関する詩的解釈を導き出した。

ピアノ作品に対して付けられた「Gesänge (歌)」という題名は「歌」を含んだ編成による楽曲を想起させるとともに、歌曲との関連を示唆するメタファーであると考えられる。

シューマンが出版者に宛てて書き記した「朝が近くなって明けていく様」に改めて照らし合わせてみると、次のように解釈できる —— 第 1 曲では世捨て人が諦観も支配するなかで朝の光を求める。第 2 曲では、徐々に朝が明けていき、幸福の回想となる。第 3 曲では様々な戦いが暗示され、第 4 曲では日が翳り、死への警告が仄めかされる。終曲では、世捨て人の時点に回帰し、最後には絶望の先に希望の朝の光が差し込んでくる —— 。作品のタイトルを再度考えてみると、「Frühe」は「初期」とも読み取られ、シューマンの人生の回想をも示唆されている可能性が見えてくる。《暁の歌》が作曲された 1853 年には新ドイツ楽派が台頭し、絶望に陥ったシューマンの前に若い有望な芸術家たちが現れる。「新しい道」執筆の直後に書かれたこの作品はシューマンの未来へ向けた希望をもとに作曲されたと考えられるのである。また本作品が初期の作曲手法をもとに発展させられていることも「回想」の意味に含まれよう。このように《暁の歌》は、文学的なものとシューマンの実人生、

そしてシューマンの様々な理念が集約された極めて意義深い作品であり、アドルノの言葉をそのまま当てはめることはできないまでも、シューマン独特の晩年を象徴する作品とすることができる。シューマンの作品研究はいまだ解明の途上であるが、本論文は作曲家の後期作品解明の一端を担うものとなるだろう。

審 査 結 果 の 要 旨

＜リサイタル審査＞

受審者により、約2時間（15分休憩含む）の博士課程学位申請リサイタルが講堂にて行われた。
そのあと、審査員4名が意見を述べ、約15分にわたり審議及び合否判定を行った。

リサイタルは下記のプログラムにより行われた。

プログラム

第1部

- 1 ロベルト・シューマン：《幻想小曲集 Fantasiestücke》Op. 12

第Ⅰ巻 Heft I

〈夕べに Des Abends〉

〈飛翔 Aufschwung〉

〈なぜに Warum?〉

〈気まぐれ Grillen〉

第Ⅱ巻 Heft II

〈夜に In der Nacht〉

〈寓話 Fabel〉

〈夢のもつれ Traumes Wirren〉

〈歌の終わり Ende vom Lied〉

- 2 ロベルト・シューマン：《3つの幻想小曲 Drei Fantasiestücke》Op. 111

第1曲 Mit leidenschaftlichem Vortrag

第2曲 Ziemlich langsam

第3曲 Sehr markiert

第2部

- 3 セルゲイ・ラフマニノフ：《10の前奏曲 10 Preludes for Piano》Op. 23

第1番 Largo

第2番 Maestoso

第3番 Tempo di minuetto

第4番 Andante cantabile

第5番 Alla Marcia

第6番 Andante

第7番 Allegro

第8番 Allegro vivace

第9番 Presto

第10番 Largo

4 ロベルト・シューマン：《暁の歌 Gesänge der Frühe》Op. 133

第1曲 Im ruhigen Tempo

第2曲 Belebt, nicht zu rasch

第3曲 Lebhaft

第4曲 Bewegt

第5曲 Im Anfang ruhiges, im Verlauf bewegteres Tempo

リサイタル前半はR. シューマンの初期の作品「幻想小曲集」作品12と後期の作品「3つの幻想小曲集」作品111が演奏された。後半ではS. ラフマニノフの「10の前奏曲」作品23と「暁の歌」作品133が演奏された。

「幻想小曲集」作品12においては、若いシューマンの文学性やロマン派特有の精神性が表現されていたが、より一層の掘り下げた演奏の必要性も求められた。

「3つの幻想小曲集」作品111は最後に演奏された「暁の歌」作品133に繋がる書法や詩情が重要な鍵になる作品であるが、その点はよく研究された演奏であった。難解と言われる後期作品であるが説得力のある内容であったと評価された。S. ラフマニノフの「10の前奏曲」作品23は、難曲であり全部を通して演奏することは珍しいが、ロシアのピアノズムや近代ロマン派のヴィルトーソ表現が高い次元で実現されていた。R. シューマンの「暁の歌」作品133は、今回の論文の主要テーマに取り上げられた作品で、普段はほとんど演奏される機会の無い作品である。論文ではヘルダーリンの小説「ヒュペリオン」との関連を研究しているが、その内容を実際の演奏で支えることのできるものであったと言えよう。ただし、テンポの設定がかなり自由すぎる場所もあり、もう少し楽譜に書かれた内容に沿うことも必要と指摘された。また時折集中力に欠ける表現も見られた点があり、改善を求められた。

全体的には質の高い芸術性を感じさせる演奏で、本人の個性も十分に表出された内容であり、博士リサイタルとしてふさわしく全員一致で合格と判定した。

<論文審査>

審査の方法

公開発表会では論文執筆者本人が約40分間にわたって、音源を使いながら論文の内容を説明した。続いて質疑応答の時間を設け、約1時間10分で公開発表会を終了した。その後、約40分にわたって、審査員3名と外部審査員1名で論文審査および関連分野に関する口述試験を行った。本人退席のうえで、審査員および外部審査員によって審査および合否判定を行なった。

審査の内容

本論文はロベルト・シューマンが晩年に作曲し、自ら出版に関わった最後のピアノ・ツィクルス《暁の歌Gesänge der Frühe》Op. 133について、ヘルダーリンの書簡体小説『ヒュペリオン——あるいはギリシャの世捨て人』との関係、シューマン自身の後期の歌曲との比較考察を通して、作品の標題解釈を導き出そうとするものである。また《暁の歌》の作曲された1853年前後のシューマンをめぐる周囲の状況も踏まえて、本作品がシューマンの後期においていかなる意味を持つかについても考察を加えている。

シューマンのピアノ作品については、1820年代から30年代にかけての初期の作品群は演奏の機会も多く、多数の充実した研究があるものの、後期作品についてはコンサートでとり上げられることもめったになく、本格的な研究も少ない。とくに《暁の歌》については、それまでのシューマンのピアノ作品とは異なる独自性を有しており、資料もあまり残されていないため、作品について詳細がわかっていなかった。本論文はこれまであまり光の当てられていなかったシューマン晩年の作品《暁の歌》をとりあげ、作品の分析や歌曲との比較を通して、標題の意味内容を考察し、作品の新たな解釈を試みたものである。

序論では、《暁の歌》作曲前後のヨーロッパの情勢について、またデュッセルドルフの音楽監督に就任したシューマンの活発な創作活動について述べている。

第1章では、《暁の歌》の作曲の経緯と出版、被献呈者、タイトルなど、作品の基本的な事項を扱っており、自筆譜にヘルダーリンの『ヒュペリオン』の登場人物「ディオティーマ」の名が記されていたことも述べられている。

第2章では、《暁の歌》を構成する5つの楽曲それぞれを分析し、特徴的な作品構造を導き出している。

第3章では『ヒュペリオン』との関係を調べ、そのうえで音名を象徴として用いる手法を考察している。とくに《謝肉祭》との比較により、《暁の歌》の音名象徴の手法がより抽象的、内面的になっていることを指摘している。

第4章では後期歌曲との比較を行っている。書法と詩の内容の両面から《暁の歌》の特質を解析しようとしており、諦観や死を内容とする歌曲との共通点を炙り出している。

第5章においてはこれまでの分析および考察を総合し、結論として標題に関する解釈を導き出している。ひとつにはピアノ作品でありながら「歌」という言葉を含むタイトルそのものが、歌曲との繋がり示唆しているという指摘である。また「暁」が「明け方」であり、また「初期」とも解釈できることから、人生の回想と希望という意味を含んでいるとし、この作品が文学とシューマン自身の人生を反映した最後の歌として解釈できるとして論文を結んでいる。

本論文は、シューマンの晩年のピアノ作品《暁の歌》の詳細な分析と考察を通して、この作品の新たな標題解釈を行なおうとするものである。とくにピアニストとして歌曲の伴奏をするなかで、歌曲との関係に気づいたことから考察を進めたことは、実技系ならではの論文のあり方として特筆される。この作品と歌曲との関係についてはこれまで指摘はされていたものの、後期の歌曲全てを対象とした比較考察ははじめての試みであり、その点で高く評価される。また「音名象徴」という手法について《謝肉祭》との比較を行い、後期の作品の特徴を探った点でも意義がある。予備審査の段

階では、研究の方法論と考察の仕方について粗さがあったが、その点もほぼ修正されている。

以上のような点から、本論文と口述試験を審査員全員一致で合格と判断した。